

たんの小史

ふるさと端野

③

遺跡から見える古代の端野

(その3)

続縄文時代

紀元前三〇〇年頃、北九州の縄文時代の人たちが大陸（中国）から水稻耕作と金属の道具を取り入れた新しい文化、弥生文化をつくりだしました。

この水稻耕作は驚くほど早く津軽に達しましたが、北海道にはその痕跡がありません。

この時代の人たちは、縄文時代と同じように狩猟や漁業をしたり、植物の実などを取り生活をしていました。

この時代の土器片が、忠志の仁頃川と常呂川左岸近くで、また、北登一班（旧公民館裏手台地）で発見されています。

擦文時代

九世紀頃、続縄文の文化は、東北地方の影響を受け、これまで網目の紋様の土

器が無紋に近い土器に代わったことから、「擦紋土器」と呼ばれています。住居も円形から方形に変化し、炉がカマドになりました。

この時代の端野の遺跡に協和の広瀬遺跡（東一五号線常呂川右岸段丘）があります。昭和四四（一九六九）年から三ヶ年にわたる調査により、三軒の住居址が発掘され、粘土でつくられたカマドが確認されました。遺物とし復元完成を含めた八個の土器と鹿の角と穿孔された熊の牙製品が各一点、内耳鉄鍋の破片、木製の椀、浅鉢のほか木製の紡錘車などが出土しています。

北海道では、この擦紋文化時代を境にして木製や漆器などが登場したといわれています。

広瀬遺跡から出土した木製品の素材を鑑定した結果、ヤチダモ、イタヤカエデであり、これらはこの遺跡付近で原生しており、身近な材料を利用していたことがわかります。

他の幾つかの遺跡では、アワ、ヒエ、ソバ、オオムギ、モロコシ等の穀物が出土しており、この時代には農耕が行われていたことがわかります。この時代の後がアイヌ文化の時代になります。

*参考文献

「端野のむかし」昭和四〇（一九六五）年

加藤晋平、藤本強著

「二万年前のたんの」昭和四四（一九六九）年

加藤晋平、藤本強著

「縄文時代のたんの」昭和四七（一九七四）年

加藤晋平、藤本強著

田中 誠

広瀬遺跡



(裏面に続きます)

注※1

◇端野のむかし

昭和四〇（一九六五）年一月三日、当時東京大学考古学教室に籍を置かれる加藤晋平、藤本強氏等に調査を依頼し、端野町が発行しました。調査資料をもとに端野町の先史時代のあらましを期しています。調査により町内で一三八箇所（一）の遺跡の存在を確認しました。

◇一万年前のたんの

昭和四四（一九六九）年一月三日、「端野のむかし」に続いて加藤晋平、藤本強氏等に調査を依頼し、その後の調査結果を取りまとめ、端野町が発行しました。同氏等は早くから常呂川流域の遺跡に着目され、独自の調査を行ってこられた方々です。

◇縄文時代のたんの

昭和四七（一九七二）年三月三十一日、加藤晋平（当時立教大学講師）を代表として六〇七七年前から二〇〇〇年前までの間、端野町に存在した縄文文化について記したもので端野町教育委員会が発行しました。縄文文化の中から、石刃鍬文化、縄文中期文化の問題、縄文後期の墓の三点について述べられています。

広瀬遺跡発掘場所

